

みなと物語



お城のドンは 天保山砲台の大砲だった



天保山燈台と砲台(明治3~5年)
社団法人 霞会館所蔵『鹿鳴館秘蔵写真帖』

現在、大阪城天守閣の入口右脇に設置されている大砲は、かつて天保山砲台にあった大砲と伝えられています。ペリーの浦賀来航の翌年、嘉永7年(1854年)に、日本の開国を求めるロシアの黒船が大阪湾に進入し天保山沖に停泊するという事件(ディアナ号事件)が起きました。巨大な黒船の出現と警備のため鉄砲を持った臨戦態勢の

武士たちが右往左往するありさまに、大坂のまちは騒然となりました。この事件により幕府は大坂近海の防備の必要性を認識することになり、元治元年(1864年)、樹木を伐採し天保山の山を切り崩して、天保山台場(砲台)を築きました。この工事によって、遊山の地であった天保山はほとんど平らになってしまいました。台場のかたちは、函館の五稜郭(同年に完成)に類似した星型に造られました。ここに配備された大砲のひとつが、明治になって大阪城へ運ばれたと伝えられています。

この大砲は、明治3年(1870年)から同7年(1874年)まで朝昼晩の時報として、それ以降は正午の時報として号砲を轟かせていました。号砲は堺あたりまでひびき「お城のドン」「お午(ひる)のドン」として市民に親しまれ大阪の名物となっていました。大正13年(1924年)頃に中止されました。



大阪城内午砲発射の光景
大阪城天守閣所蔵「大阪城址絵葉書」



現在の「大砲」 直に手でふれることもできます。
※大阪城天守閣には入場料が必要です。
(大人600円 中学生以下無料 12/28~1/1は休館)

大砲の全長は352cm、砲口内径20cm、外径40cm、青銅製で重さ2.4トンもあり、砲架(大砲を支える台)は木質部のケヤキ材の腐朽に伴い、昭和61年(1986年)に大阪市の手によって修復され、当初の姿に復元されたものです。現存する幕末の和製大砲としてとても希少であり、大阪市指定文化財となっています。